

40年超えの 老朽原発再稼働に 反対しよう！

■高浜原発1・2号機 運転延長審査、大詰め

原子力規制委員会は6月10日、原則40年の運転期間を延長して再稼働しようとする高浜原発1、2号機について、設備の詳細設計を示す工事計画を認可しました。最長20年の運転延長審査にも早ければ6月22日に合格する見通し。運転延長審査に2基が合格すれば、新規規制基準の施行後初めてとなります。

■最初から再稼働ありきの審査

40年超運転の審査期限の7月7日までに合格が必要な三つの手続きのうち、原子炉設置変更許可に関しては今年4月に合格済み。

工事計画はケーブルの防火対策や、原子炉格納容器上部を鉄筋コンクリート製のドームで覆う安全対策工事と検査を、2019年10月まで行い、蒸気発生器など一部の設備は工事後の使用前検査で耐震安全性を確認することになっています。しかし、この蒸気発生器の耐震安全性については本来、工事計画前に済んでいなければなりません。耐震安全性を確認して工事計画を出すというのが本来の在り方です。工事計画書が審査期限の7月7日に間に合わなければ廃炉にするのがルールです。



2016年6月17日

STOP原子力★関電包囲行動

ブログ：<http://stop-kanden.seesaa.net/>

連絡先：東大阪市源氏が丘16-10 源氏が丘教会気付

それが間に合わないので、耐震安全確認は工事後の使用前検査でよいとしたのです。はじめに「再稼働ありき」の「審査」です。

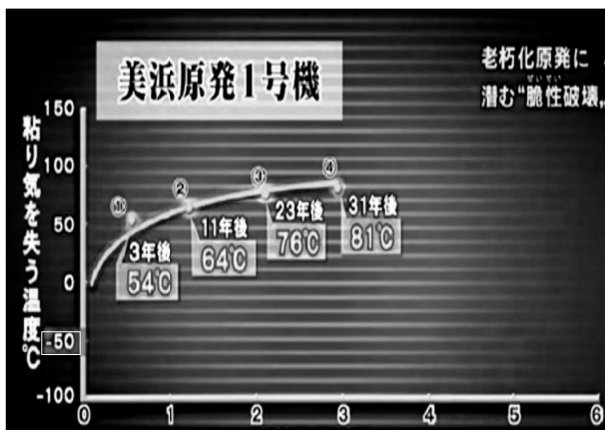
■ 中性子線が当たって脆くなる原子炉圧力容器

老朽原発は、高温、高圧、高放射線（特に中性子線）に長年さらされているので、配管等の金属が極めて脆くなり、腐食も進んでいます。配管は交換できますが、圧力容器は交換することができません。圧力容器は鋼鉄できています。鋼鉄は通常粘り気がありますが温度が下がると固くなって脆くなります。圧力容器は、長年中性子線が当たることによって鋼鉄の粘り気がなくなる温度が上がってきます。

事故が起きて緊急冷却しなければならなくなったとき、どうなるでしょうか？温めたガラスコップに氷水を注いで急激に冷やすと、ガラスコップにひびが入って割れてしまいます。そのような現象が圧力容器でも起こりかねないのです。

廃炉を決めた美浜1号炉は運転開始が1970年。開始時の粘り気を失う温度は-50℃でした。それが31年後には81℃にまで上がりました。

高浜1号機は1974年、2号機は75年に運転を開始しています。美浜1号機と4、5年しか違いません。それなのに20年も延長してほんとうに大丈夫でしょうか？



40年以上も中性子線に曝された圧力容器、しかも2011年から5年も停止していた原発を動かすことは絶対にはなりません。

建設当時の技術者もほとんど退職し、当時の記録が散逸している可能性もあり

ます。そんな状態で十分なメンテナンスは不可能です。老朽原発の再稼働をとめましょう。



400年前にもあった東北一熊本大地震

川内原発を今すぐ止めよ！ 伊方原発動かすな！

6月12日、熊本県八代市で震度5弱の地震が起こりました。熊本地震は2か月たった今もおさまりをみせていません。2011年東日本大震災から今回の九州大震災までの一連の状況が、江戸時代初期の17世紀前半とかなり状況が似ていると歴史学者・磯田道史さんが言っています。

「AERA 2016年5月2日－9日合併号」掲載の磯田道史さんの記事を要約しました。政府と九電は自然の驚異の前に謙虚になり川内原発をとめるべきです。また、伊方原発も再稼働するべきではありません。以下要約。

●1611年に「慶長の三陸沖地震」が東北地方で起きました。これは東日本大震災と同タイプの東北沖の海溝型巨大地震で、津波による多数の死者が出た。

●その8年後に、今回と同じ肥後地方で、一つの都市が壊滅するような大地震が起きた。熊本藩の地誌「肥後国志」14巻には「卯の刻（午前6時）より大地震い、午の刻（正午）にいたり、城楼崩壊す」とある。

この城楼とは、八代にあった麦島城のこと。最初の地震から数時間、幾度となく襲いかかる激震で6時間後に^{やぐら}櫓などの建物が崩壊してしまった。城の石垣や櫓が壊れ落ち「死傷するもの無数」、都会だった八代の町が、荒陵と化した。おそらく震度6強ないし7の非常に強い揺れと余震で、消滅したのだろう。

●熊本では、記録に残る最も古いものとして、744年、天平時代にも

